

火花

第 41 号

1985, 1

火 花

第 41 号 1985, 1

共産主義者同盟（火花）

- | | | | |
|----------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|--|
| ◎
研究ノ
ト
労農独裁と永続革命 | ◎
帝国主義的労働統一攻撃の現局面と
共産主義者の任務 | ◎
侵略、反革命軍事力の増進をうたいあげる
「防衛白書」 | ◎
自国ブルジョア政府にたいする革命的政治
闘争とはどのようなものでなければならぬか |
| P
23 | P
19 | P
15 | P
1 |

自国ブルジョア政府にたいする革命的政闘争とは

どのようなものでなければならぬか

はじめに

I 共産主義と労働運動の結合について

① なぜ、共産主義と労働運動の結合か？

② 共産主義革命の具体的方策をもって労働運動と結合していかねばならない

II プロレタリア独裁と「正規の攻囲」について

① プロ独とプロレタリア民主主義

② 「正規の攻囲」とプロ独の準備

III 「決戦」と革命への移行について

IV いわゆる「帝国主義戦争を内乱へ」について

① レーニン提起の核心とは？

② 「内乱」を組織していくための活動方針をめぐって

V 政闘争の組織化について

① 階級闘争と政闘争

② 政闘争の組織化

③ あらゆる闘争形態に通じていなければならない

はじめに

われわれの『火花』活動にたいし、「主張の原則的正しさは理解できるが、実際活動をどのように進めんとしているのかがよくわからない」との意見が多く寄せられている。これは、おそらく、われわれの『火花』が、新左翼諸党派の機関紙(誌)と編集方針において違っていることに基づいていると思われる。

新左翼諸党派の機関紙(誌)は、週刊のものであれ、月刊、あるいは不定期刊のものであれ、一面論文が政治課題と動員戦の呼びかけに大抵あてられている。それは、情勢分析・方針・任務のつきぎを形式としている。この形式は、主として政治的動員戦用として定着してきたものであり、内部の意志統一を中心任務とするものである。われわれの場合、こうした活動は基本的に内部機関誌でおこなっており、『火花』はプロレタリアートの前衛部分を思想的に統合していくことを任務とする論文(綱領・戦術テーゼ)を中心に編集している。そこでは全国の共産主義者・先進的労働者の問題意識

と直接結びつくことがめざされている。これは、新左翼諸党派とわれわれが自分の任務を別のものとして考えていることの反映である。

したがって、われわれが『火花』で明らかにしえる実際活動はどうしても、抽象的・原則的なものとどまっている。これは、一方ではたしかにわれわれの弱さでもある。もちろん、われわれは自分の組織活動を、可能な限り『火花』に反映させていくようにしている。ただし、現在、理論誌と政治新聞を分離するだけの力をもっておらず、また『火花』も月刊でしかなく、極めて不十分な形でしか反映しえないのが実情である。そこで、われわれは、必要に応じて実際活動にたいする自己の見解を、簡潔にまとめて提起するようにしている。

今回、読者の意見を受けて、われわれは、「革命的政闘争の組織化と真の団結に向けて」という論文を計画した。それを書きはじめてみると、簡潔にしても、かなりの量になることが明らかになった。そのため、前半と後半の二つに分けることにした。今号に発表するのは、前半部分に属するものである。とはいっても、それは一つの独立した論文の形式をとっている。

本論文は、いわば「戦術テーゼ」のうちの、政闘争の組織化に関連する部分(■自国帝国主義打倒、V武装闘争・および補足テーゼ、労働組合運動に関して、I共産主義と労働運動の結合)の解説ないし、補足といえるものである。これを、われわれは「共産主義と労働運動の結合」という、きわめて一般的な原則問題からはじめて展開している。それゆえ、読者は、これによって、今日の焦眉の問題である「自国ブルジョア政府にたいする革命的政闘争とはどのようなものでなければならぬか」を、十分、深く検討できはず

である。

I 共産主義と労働運動の結合について

1 なぜ、共産主義と労働運動の結合か？

共産主義(社会主義)と労働運動を結合に向かわせたのは、マルクス、エンゲルスの主要な功績である。レーニンは一八九七年末に、『ロシア社会民主主義派のうちの後退的傾向』で、つぎのように述べている。

「ヨーロッパのすべての国で、社会主義と労働運動とは、最初はたがいに存在して存在していた。……すべてのヨーロッパ諸国で、われわれは、社会主義と労働運動とを単一の社会民主主義運動に融合させようとする志向がますます強く現われてきたことを、見るのである。このように融合されるとき、労働者階級闘争は、有産階級による搾取から自己を解放しようとするプロレタリアートの意識的闘争に転化し、社会主義的労働運動の最高形態である独自の社会民主党が作りだされる。社会主義を労働運動との融合に向かわせたことが、K・マルクスとF・エンゲルスの主要な功績である」(④全第四巻P二七三)。

最初にことわっておきたいが、われわれは、社会主義という用語はあまり使用せず(特別の必要性がないかぎり)、一般的に共産主義という用語を使用している。というのも、レーニンが共産主義の低い段階という意味で使用した社会主義の概念が今日、歪曲されているからである。少なくとも、この用語は、第一には先進資本主義

国の社民、スターリン派によってブルジョア的に歪曲されていること、第二には、戦後政治的に独立した後発国のいくつかが「××社会主義国」といった名称を用いていること、第三には、現在のソ連中国を社会主義とする意見があること、第四には、「プロ独↓社会主義・共産主義」という三区分説によって歪曲されていること（これへの批判は「火花」連載論文「今、プロ独・ソビエト運動をどう考えるか」を見よ）等を考慮して使用する必要がある。われわれのいう共産主義の概念は、なによりもマルクス、レーニン等の諸学説を意味すると同時に、綱領上・戦術上・組織上の真に革命的な基準にもとづいて現実の資本主義を止揚する革命運動をさす。

さて、レーニンを引用したが、彼の主張は共産主義と労働運動が最初は別々に発展したこと、切り離されていたことがその両方を弱体化させたこと、両方の結合（融合）によってこそ労働者の階級闘争はプロレタリアートの意識的な闘争に転化するということである。このことをあらためて確認しなければならぬのは、労働者階級の利益と、共産主義を同一視する傾向が、われわれのまわりに見られるからである。もちろん、それは一つの政治主張をもって存在しているわけではなく、労働運動の自然発生性に拜跪している諸グループ、諸活動家の傾向として存在している。

労働者の階級の利益とはきわめて広い内容をもっている。それは労働者階級を抑圧する経済上・政治上・イデオロギー上のすべてに對立するものである。その階級の利益は、彼らをして共産主義を受け入れやすいものにする。共産主義の理論は、もともと深く、またもともと正しく労働者階級の困苦の原因を規定しているもので、もしこの理論自身が革命的創造性にあふれてさえいれば、労働者はこの

およそ共産主義イデオロギーを軽視すること、およそそれから遠ざかることは、とりもなおさずブルジョアイデオロギーを強めることとなる。それは、ブルジョアイデオロギーの方が、共産主義のイデオロギーよりもその起源において古く、いっそう全面的に仕上げられていて、はかりしれないほど多くの普及手段をもっているからである。このように、労働者階級（プロレタリアート）の利益と共産主義とを同一視することは、結局、労働運動の自然発生性に拜跪し、ブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化の結果せざるをえない。

共産主義から切り離された労働運動が不可避的にゆがめられ、ブルジョア化するのには、総評労働運動や、民間活動家を見れば明らかである。労働運動は、ただ共産主義と結合するときのみ、真の意味で革命的となり、資本主義を打倒し、共産主義社会（もとより、これは世界的にしか不可能である）を実現していくことができるのである。

2 共産主義革命の具体的方策をもって労働運動と結合 していかなければならない

このように述べてくると、労働運動と共産主義を結合さすためには、その間に「掛け橋」をつくる必要があるとか、なんらかの「見通し」（戦略・戦術的図式）によって労働者を熱中させる必要があるという声が聞えてくる。トロツキズム、革共同の諸君の方からである。

しかし、そのために必要なのは、労働者階級に向かって彼ら自身

理論を容易にわがものとすることができる。しかし、共産主義を、労働者は自然発生的には、すなわち「労働者と雇い主との関係」の圏内では創造することはできない。労働者が、階級的・政治的意識つまり共産主義的知識をくみとって行くことができるのは、「すべての階級および階層と国家および政府との関係の分野、すべての階級の相互関係の分野」である。

このことは、共産主義者が労働者階級の中からは生み出されないということとは違ふ。逆に労働者階級こそ、もともと多く共産主義者を輩出していること、他の階級の中からその階級的立場を捨てて共産主義者として生きようとする者はまれな例外である。インテリゲンチヤが共産主義者になるのは、その小ブルジョアの立場を捨て、労働者階級の闘いを支持し、それと切っても切れないように結びつくときだけである。

共産主義の学説と労働運動が最初、別々に発展してきたのは、共産主義の発生・発展が人類の知識の全素材を基礎としており、科学の高度な発展を前提にし、学問的活動を要求するのたいし、労働運動は自然発生的には「雇い主との関係」の圏内にとどまる意識しか生み出さないからである。もちろん、今日の共産主義はロシア革命をはじめとする国際プロレタリアートの闘いの歴史と結びついていなければ共産主義ではない。ただし、各国の一定の歴史の時期をとってみれば、労働運動の沈滞期に共産主義の学説の発展があることも、共産主義の学説があまり発展していない時期に労働運動が高揚することもある。はっきりしていることは、両方の相互関係であり、両方の革命的発展は、しつかりした結合関係をとうしてしかありえないということである。

の地位を明らかにし、彼らを抑圧している制度の政治・経済構造を暴露し、この制度を打倒する以外に自分を解放しえないことを明らかにすることである。それは、労働運動のそれぞれの段階で、この運動に受動的に奉仕することではなく、プロレタリアートの利害を代表し、プロレタリアートの階級闘争に終局目標と政治的任務をしめし、この運動の政治的・思想的独自性を守ることである（これの具体的な内容については、われわれの綱領を見よ）。

ここで、「終局目標と政治的任務をしめし」としているのは、今日の資本主義・帝国主義にたいして、共産主義一般を対置するだけでは無力だからである。資本主義の具体的悪に、共産主義革命の具体的方策（プロ独の任務）が対置される必要がある。

これについて（つまり、われわれの綱領実践部分について）、「現在は不必要ではないか」との意見がよせられている。しかし、それは実践的に、直接に共産主義革命が実現可能であるということを確認しないことにはならないか。なぜなら、実践的に、直接に共産主義革命が実現可能であるなら、革命の具体的方策が不可欠なはずだからである。また、具体的方策の必要性は、現在の情勢によっても規定されている。

現在、独占の巨大化と金融寡頭支配の極度の発展が見られる。したがって、独占と非独占の矛盾が拡大し、小ブルジョアジーの反独占運動が生れている。独占だけでなく、資本そのもの、資本主義制度と非和的に対立しているプロレタリアートは、彼らとその要求を異にしている。

このような情勢の中で、プロレタリアートが自己を支配階級に高め、共産主義革命を遂行していくためには、小ブルジョアジーを引

きつけるか、中立化することがせひとも必要である。それには、プロレタリアートは、共産主義革命の具体的方策をプロ独の任務として卒直に公然と提示することが求められている。それは同時に、プロレタリアート自身にとって不可欠である。

独占と非独占の矛盾の拡大・激化は、階級闘争の自然発生的あらわれに、小ブルジョアジーのイデオロギー（自由競争・一般民主主義）の流入を不可避とする。このことに拝跪し、「反独占民主主義革命」社会主義革命「共産主義革命」として路線化している党派（日共）さえある。

これは、もし、共産主義一般しか問題にせず、革命の具体的方策を提起しなければ、労働運動は不断に小ブルジョアジーの側、ブルジョアジーの側に包摂されることを意味する。それを避け、プロレタリアートを一人別にとり出し、その独自性を守るためにも、共産主義革命の具体的方策をもって武装することが求められている。

共産主義と労働運動の結合というものを、共産主義革命の具体的方策を提起し、労働運動と結合するところまで発展したとき、そのときはじめて今日の意味を獲得することができるのである。

Ⅱ プロレタリア独裁と「正規の攻囲」について

1 プロ独とプロレタリア民主主義

共産主義革命の不可欠の条件をなすものが、プロレタリアートの独裁であるということは、日共のような日和見主義者と手を切った共産主義者なら、みな完全に承認するところである。さて、現在の

る（パンフ『われわれの綱領』第三分冊を見よ）。しかし、それへの批判は、パリ・コミューンだけでなく、国際帝国主義を打倒するための正規軍建設を始めとして、歴史的に豊富化されているところのソビエト・プロレタリア民主主義の形態の自主的検討をもってなされる必要がある。

以上に見られる、トロツキズム・革共同の誤りは、彼らがプロ独をブルジョアジーにたいする弾圧・収奪という点でしか理解していないことと関連している。しかし、プロ独はそれだけではない。同時に、他の勤労被抑圧大衆にたいする指導をもっとも完全に実現することである。

プロレタリアートの党は、プロ独をもってブルジョアジーと仮借なく闘争し、同時にその闘争において、プロレタリアートの全体または圧倒的多数だけでなく、他の被抑圧勤労大衆をもひきつけ、彼らを引いて進むことが必要である。そして、農工商業の小ブルジョアジーと、この階級に照応するインテリゲンチヤ、各種専門家を統制していかなければならない。

ここで重要なことは、このようにプロ独を組織することをとうして、ブルジョアジーに最後の打ち勝ち、新しい革命的規律をつくりあげ、共産主義社会を建設していくという、そうした世界的能力をプロレタリアートが実際に獲得していくことである。コミューンとか、ソビエト型国家（プロレタリア民主主義）とは、このプロレタリアートの世界的能力を発展させていくための形態である。

換言すれば、ソビエト型国家としてのプロ独は、ブルジョアジーと闘争するための権力機関であると同時に、資本主義社会のもとで抑圧され、分断され、無知にされ、墮落させられてきたプロレタリ

ソ連、中国などの国家をトロツキズム・革共同が、コミューン諸原則からの逸脱と批判している点はどうであろうか。コミューン諸原則とは、常備軍の廃止と全人民の武装、執行と立法をあわせもつ機関、公務員の完全な選挙制と解任制、労働者なみの奉給、等々である。これらは、マルクスがパリ・コミューンの総括として明らかにし、レーニンが『国家と革命』の中で整理したものである。

プロ独が仮に今、世界的に実現されたとしても、プロレタリアートの力はブルジョアジーより弱いと見るべきである。ブルジョアジーの優位性は、生活条件の豊かさ、より高い教養、軍事への習熟の程度、各種専門家との結びつきの強さがある。また、小商品生産者が資本主義とブルジョアジーとを自然発生的にたえず再生させ、復活させるからである。プロ独下では、ブルジョアジーは必死の反抗を企てる。だから、プロレタリアートが権力を獲得しても、ブルジョアジーにたいするプロレタリアの階級闘争は終るわけではなく、かえって激烈で、広範で、仮借ないものとなる。

まして、ソ連にしろ中国にしろ、一国的形態でしか権力を握っていないのである。また、国際帝国主義、国際独占体は圧倒的力をもっており、ソ連、中国のブルジョアジーは国際的結びつきを保持していたのである。したがって、そこではただちに常備軍を廃止することはできず、むしろ新しいプロレタリアート・農民の正規軍（常備軍）の建設が必要だったのである。また、文化的に遅れていた以上、他の諸原則も、そのまま全面的に貫徹しえなかった（各種専門家にたいする態度、その他）のもしかりである。

ソ連、中国などの国家が、プロ独権力としてはまったくゆがめられ、すでにソ連では特権階級の権力に変質していることは事実であ

アートの支配階級となり、単一の階級として、その新しい規律にもとづいて共産主義社会を建設していくための形態であるし、そうでなければならぬのである。ここに、プロレタリアートが、できあいの国家（ブルジョア国家）を利用できない理由がある（資本主義のもとで、われわれがブルジョア民主主義をとりあげるのは、プロレタリアートの政治的自由の見地からである）。

もちろん、このプロレタリアートの世界的能力は、プロレタリアートの前衛党をつうじて、その指導と教育をつうじて勝ちとられし、労働の組織性、規律の発展をとうして勝ちとられなければならないのである。そして、プロレタリアートの党はかかる指導と教育の手段として、ソビエト（コミューン）や、プロレタリア民主主義を利用する。プロレタリアートはここにおいて始めて、全面的に政治・経済活動にかかわり、行政・管理の仕事に参加し、国家運営に参加するのであり、そのことをとうして組織性と規律を発展させ、プロレタリア世界革命・共産主義革命を最後までやり抜く能力を身につけてゆくことができる。

このように、プロ独とプロレタリア民主主義を考えているからこそ、われわれは革共同と違って「プロ独の本質は、党に代表されるプロレタリアートの組織と規律にある」とし、自分の綱領に「プロレタリアートにその遠大な歴史的使命をはたす能力を獲得させることを自己の任務とする」とはっきりと書いているのである。

2 「正規の攻囲」とプロ独の準備

プロレタリアートが政治権力を握り、維持していくためには、自

然発生的には不可能であり、目的意識的な準備活動が必要である。これについて、「正規の攻囲」を主張する諸君（赫旗派、その他）がいる。

この「正規の攻囲」という主張は、レーニンが「なにをなすべきか？」等で「われわれの計画としての戦術」は、いまずく突撃を呼びかけることを拒否して、敵の要塞の「正規の攻囲」を要求すること、言い換えれば常備軍を集合し、組織し、動員することに全力をそそぐように要求することにある」（国民文庫P二五三）として提起したものである。

これは、一般的には「敵の要塞の正規の攻囲」を実現する形で党細胞を建設することとして理解されてきたし、「共通の新聞の発行と配布の活動にもとづいてひとりてに形づくられる受任者網」を意味し、それをもって「武装蜂起を準備する」とされてきた。今日、「正規の攻囲」を主張している諸君も、このように把握している。ところで、ロシア革命を一つとってみても、この時期（一九〇一年～一九〇二年）以降も、実に多くの経験を有し、ポリシェビキの戦術や組織計画の発展が見られる。一九〇五年革命の時には、ソビエトが生れ、ポリシェビキは臨時革命政府への参加、革命の軍隊の建設を決議している。また、一九一七年革命では、蜂起を技術として取りあつかい、そのための特別の部隊（軍隊）を組織し、権力奪取をおこなっている。さらに、国際帝国主義の闘い、内戦の中で正規軍を建設している。これらの経験は、「正規の攻囲」ということだけで総括するにはあまりに豊富な内容を含んでいる。しかも、われわれは、その後、中国革命、インドシナ革命、キューバ革命等々を経験している。

この問題は、今日の日本の左翼の間では、戦略・戦術的な図式主義によって一面化され、歪曲されている。それは、革命への移行における根本問題に関するものである。

レーニンは一九二一年に「すべての革命、とくに二〇世紀における三つのロシア革命によって確認された革命の基本法則」としてつぎの点をあげている。

「革命のためには、まず第一に、労働者の大多数（あるいは、すくなくとも、自覚した、分別ある政治的に積極的な労働者の大多数）が完全に改革の必要を理解し、この改革のために進んで死地におもむく覚悟ができていること、第二に、支配階級が政府危機におち入り、この危機が最もおくれた大衆さえも、政治に引き入れ（あらゆる真の革命の指標は、いままでも政治に無関心であった勤労大衆のなかの政治闘争の能力ある代表者の数が十倍にも、あるいは百倍にさえ急増することである）、政府を無力化し、革命党が政府をすみやかに倒すことができるようにすることが必要である」（『共産主義における「左翼」小児病」国民文庫P九八）。

レーニンのこの指摘は、先進資本主義国の革命にとって、今日的に見ても妥当であり、すべての党派、活動家が真剣に研究する価値がある。ここで注意しなければならないのは、労働者階級の大多数の見解の転換と、改革のために進んで死地におもむく覚悟ができていること、最もおくれた大衆さえも政治に引き入れられていることを革命の条件としている点である。

「前衛だけでは勝てないのである。全階級がつまり、広範な大衆が、あるいは前衛を支持する立場をとるか、あるいははすくなくとも前衛にたいし好意ある中立をまもり、敵を支持することが完全にで

今、プロ独の準備とか、武装蜂起の準備というものを「正規の攻囲」としてのみ語ることは、こうした豊富な経験を一面化し、一九〇〇年代初頭のロシアにわれわれを引きもどすことを意味する。レーニンでさえ、一九二〇年には、「プロレタリアートの独裁を即時いたるところで準備する活動はどのようなものでなければならぬか？」をきわめて豊富な内容で提示している。（『共産主義インターナショナル第二回大会の基本任務についてのテーゼ』）それは、議会活動や反動的労働組合の中の活動等、一九〇〇年代初頭には問題とされなかったことが含まれている。党細胞の建設をとって見ても、「プロレタリアートの独裁とは、資本主義の歴史全体によって指導的役割を演ずる準備を整えた、ただ一つの階級であるプロレタリアートが「すべての勤労被搾取者にたいする指導を、もっとも完全に実現できる」とする見地から提起されている。

今日のわれわれには、プロ独の準備内容を、こうしたレーニンの歴史的立場と全体的活動を踏まえ、さらにその後の経験の総括として考えることが求められている。とくに、国境を越えた革命戦争、革命の軍隊、政治的自由との関係で、街頭闘争、様々な大衆組織の発展等をプロ独の準備の中につかりと位置づける必要がある。それには、いし、「正規の攻囲」をことさら主張することは、実際はこれらの活動を歪曲し、運動の自然発生的性への迎合を合理化することになるのではないだろうか。赫旗派の指導部の諸君は一度よく考えて見てほしいものである。

III 「決戦」と革命への移行について

きない立場に立たないうちに、ただ前衛だけを決戦に投じることばかりしているばかりでなく、罪悪でもある」（同P一〇八）。

このように、プロレタリアートの全体ないし、多数者がプロレタリアートの党を支持しているだけでなく、非プロレタリア勤労大衆もが支持するか、中立化するよう意識的に活動していくことこそ革命のためには必要である。この闘いこそ、ほかならぬ革命への移行、権力奪取の条件を主体的に準備していく上での最重要問題である。

もとより、これは宣伝・扇動だけでは不十分である。それには、これら大衆自身の政治的経験が必要である。そして、この闘いの前進と、支配階級の政府危機とが結びつくときこそ、「決戦」の時である。その時には、われわれは、蜂起を技術として取りあつかわねばならない。

このように見てくれば、例えば中核派がつねに「決戦」を呼び、毎年数回にわたって蜂起を機関紙上で公然と呼びかけているのは、蜂起をもてあそぶものだとということが明らかである。彼らは、すべての活動している勢力・グループ・党・階級・大衆を考慮するかわりに、もっぱら、自己の闘争への意識と準備だけを基礎にして政策を決めている。それは彼らが、革命への移行における根本問題を理解していないことを示している。

IV いわゆる「帝国主義戦争を内乱へ」について

1 レーニンの提起の核心とは？

このスローガンは、現在、中核派などいくつかの党派によって、全面的に押し出されている。その際、彼らが強調しているのは、帝国主義間戦争で祖国敗北主義を貫かぬばならないという思想である。これはその限りで正しい。

だれもが知っているように、このスローガンを提起したのはレーニンである。レーニンが、「帝国主義戦争を内乱へ」を意識的に主張したのは一九一四年であるが、その基礎となったのは、一九一二年のパーゼル宣言である。彼は「社会主義と戦争」でこのことを総括して、つぎのように述べている。

「一九一二年パーゼルで満場一致で採択された戦争についての宣言が念頭においているものは、まさしく一九一四年にイギリスとドイツ、およびそれぞれの現在の同盟員のあいだで起った戦争である。……パーゼル宣言はこの戦争にかんして、労働者が国際的な規模で自国の政府に反対して革命的闘争をおこなう戦術、プロレタリア革命の戦術を打ち立てている」(④全第二巻P三三三)。「戦争は起り、危機がやってきた。大多数の社会民主諸党は、自国の政府と自国のブルジョアジーの側にたつて、革命的戦術のかわりに反動的戦術をとった」(同P三一六)。「すべての交戦国の社会主義者はみな、『自国』政府の敗北を希望すること……このような行動こそが、帝国主義戦争を内乱へ転化することをめざすわれわれの活動方針にそりものである」(同P三三三)。

以上の引用から明らかなくとく、レーニンは、大多数の社会民主党がパーゼル宣言を裏切り、「自国の政府と自国のブルジョアジーの側に立って、革命的戦術のかわりに反動的戦術をとった」のたゞし、宣言の「労働者が国際的規模で自国の政府に反対して革命的

闘争を行つた戦術」を擁護し、「『自国』政府の敗北を希望」して「帝国主義戦争を内乱に転化」することを主張している。だから、「帝国主義戦争を内乱へ」という主張は、カウツキー、ブレハーノフ等がパーゼル宣言を裏切り、社会排外主義に転化したことにはいさる党派闘争として宣言を擁護し、その戦術を発展させたものである。したがって、このスローガンを「革命的祖国敗北主義の思想」の復権として主張しているのは意義あることである(社共、革マル派にたいして。ただし、それはレーニンの思想の一部でしかない。さらにつぎのことが重要である)。

資本主義の独占段階においておこなわれる帝国主義列強の間での戦争は、その植民地、半植民地をめぐる分割戦の帰結である。だから、この時代には、帝国主義にたいする植民地と半植民地による民族戦争は不可避である。レーニンは、このことを考慮して、「帝国主義戦争を内乱へ」のスローガンを植民地、半植民地の民族戦争(後に民族解放戦争と規定した)を支持し、呼応し、統合するものとして主張している(『ユニウスの小冊子について』②全第二二巻)一九一九年のポリシェビキの綱領は、帝国主義の特徴づけをおこなったあと、こう述べている。

「すべてのこうしたことのため、個々の国家の内乱と、自己を防御するプロレタリア諸国および被抑圧諸国民の帝国主義列強にたいする革命戦争とが結びつくことは、避けられない」(『党綱領問題』P六九〇国民文庫)。レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」の核心をつかむためには、この思想の復権こそ重要である。

ロシア革命、中国革命と関連して、第二次世界大戦後、多くの植民地、半植民地国が政治的独立を勝ちとった。戦後の帝国主義は、

列強間での独占資本間の結びつきと競争を増大させるとともに、こうした政治的に独立した国家を、金融資本の力で債務隷属国としてしかりつけ、また反共を旗印とした軍事援助で軍隊、高級官僚と癒着し、勤労大衆を搾取し、抑圧している。したがって、帝国主義国にたいする後発諸国の人民の革命闘争は現在もつづいていて、その戦火が世界のすべてでとだえたりは一日たりともないほどである。

したがって、レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」のスローガンを復権させるためには、ソ連、中国等でのプロレタリアートの階級闘争とともに、後発諸国人民の帝国主義にたいする革命戦争を支持し、呼応する意識性が必要である。中核派の場合、その「反帝・反スタ論」に規定されて、この点で動揺をくり返している(『火花』第四〇号「反スタ・トロツキズムの誤り」参照)。

2 「内乱」を組織していくための活動方針をめぐって

ところで、レーニンは、「帝国主義戦争を内乱に転化する」ための具体的な活動をどのように考えていたのであろうか。一九一五年二月の「ロシア社会民主労働党在外支部会議」は、「今日の帝国主義戦争を内乱に転化させる途上の第一歩としては、次のことをあげなければならぬ」として、以下のような決議をおこなっている。

- (一) 軍事公債への賛成投票を無条件に拒否し、ブルジョア内閣から脱退すること。
- (二) 「国内平和」の政策と完全に手をきること。
- (三) 政府とブルジョアジーが戒厳令をしき、憲法上の自由を廃しているところではどこでも、非合法組織をつくること。
- (四) 艦壕内での一般に戦場の交戦国の兵士の交歓を支持すること
- (五) 一般にプロ

レタリアートのあらゆる革命的大衆行動を支持すること」(④全第二二巻P一五五)。

周知のごとく、中核派の場合、これは三里塚闘争に一面化されており、三里塚闘争をおこなっておれば、内乱を組織できるかのごとく主張している。もし、われわれが、今日の情勢を考慮し、レーニンの形式にアナロジーして、この問題を提起するとしてたつぎである。

(一) 国際帝国主義の侵略・抑圧・反革命を弾劾し、各国プロレタリアート・人民の革命闘争を支持すること。(二) 自国帝国主義政府の外交・軍事・治安のすべての政策の階級性を暴露すること。(三) ブルジョア国家機構の中核にたいするデモンストレーションを組織すること。(四) 機動隊を粉砕すること。(五) 帝国主義軍隊の下級兵士を獲得すること。(六) 非合法組織をつくること。(七) スターリン派と手を切つた共産主義者を統合し、強固な革命党を建設すること。

これは、われわれにとつて「戦術テーゼ」の一部でしかないことを忘れないようにすることが絶対に必要である。と同時に(四)と(五)と他の部分と質的に異っているが、これはより具体的な形態をさがし出す必要がある。また(七)はこういうふうに並べべきか深重に検討しなければならぬ。

V 政治闘争の組織化について

1 階級闘争と政治闘争

政治闘争を否定するものは、現在の階級闘争にかかわっている者の中にはだれもいないであろう。それは、日本のような先進資本主義国では、階級闘争はほとんどの場合、政治闘争に達しているか

らである。であればこそ、この階級闘争と政治闘争の概念は、様々な潮流（とりわけ社共や組合主義者）によってせめられ、切りちぢめられ、ゆがめられていることにたいし、特別意識的に闘争しなければならぬ。

マルクスは「いっさいの階級闘争は政治闘争である」（『共産党宣言』）といった。これは、資本家にたいする階級闘争が発展するのに応じて（個々の工場、個々の職種の労働者が自分の雇主もしくは自分の雇い主たちとの闘争が、自分が単一の労働者階級であることを自覚し、資本家階級全体にたいして、またその国家・政府にたいして闘争をおこなうようになるとき）はじめて、政治闘争になるという意味である。したがって、ブルジョアジーとその国家にたいする闘争を中心とする政治闘争と、労働者の状態を改善する経済闘争とを切り離せないように結びつけて組織することが求められる。

このことについて、社共はある程度まで認める。ある程度というのは、プロレタリアートの階級闘争においてブルジョア国家の暴力的破壊を認めないという限りにおいてという意味である。

社共は、国家機構をそれ自体独立させた上で、それを、だれが握っているかという具合に革命の問題をたてている。そして、民主共和制の現代国家は、それを人民ないし勤労大衆が握れば利用できるとする。しかし、現代のブルジョア国家は、資本主義の諸関係に基礎をもち、経済的に支配しているブルジョアジーの国家である。民主共和制が、最新の国家形態であるのは資本にとってである。というのも、ブルジョアジーがこの「政治的外被」を握ると「資本は自分の権力をきわめて信頼できる確実な土台の上にきづくので、ブルジョア民主共和制では、人物や、制度・党派のどのような交代も、

者の政治意識の墮落、市民生活への解体と結びつかないように、革命的政治闘争を中心に階級闘争を遂行する上での労働者の能力を高めるために闘うことである。

こうした観点をもっていない社共や組合主義者は、経済闘争に墜し、その後からついていって政治性を付与することを任務としている。彼らがこのことによつて、曖昧にしているのは、階級闘争が諸階級の利益を代表した諸党派間の党派闘争としても展開されていることについてである。

今日、政党のいちじるしい発達が見られ、諸階級は各々の利害を代表する党派（グループ）に結集して闘っている。だから、階級闘争は象徴的には党派間の闘争としてあらわれるし、政治闘争は特定の理想のための特定の闘争として存在する。

階級闘争と政治闘争の概念の日和見主義的歪曲にたいする闘争を、国家権力をめぐる問題（ブルジョア国家機構の破壊・プロ独樹立）まで深め、また特定の理想のための特定の党の問題としておこなわねばならぬ。

2 政治行動の組織化

この政治扇動・政治行動は、自然発生的な運動のエネルギーをブルジョアジーの政府と国家機構の破壊に向けて集中していくことが基本である。われわれは、こうした見地から、労働者大衆に直接、政治行動を呼びかけ、組織していかなければならぬ。

かつて、第二次ブントはこれを「中央権力闘争——マッセンスト」として提起した。それは、ブルジョア国家機構と闘争するための一

この権力を動揺させることはできない」からである。

したがって、階級闘争は政治闘争として発展する時、それが軍国主義国家であろうと民主共和制であろうと、その国家権力の構造をとらねばならぬし、そこに破壊力をことごとく集中せざるをえない。つまり、プロレタリアートの階級闘争は、ブルジョア国家機構を改善することではなくて、それを破壊すること（プロ独でとつかえること）を任務とする必要がある。

ところが、社共はこのことを、階級闘争から取り除いているのだ。そのため、彼らが政治闘争という場合、主として帝国主義政府の政策をめぐるものである。それは、資本主義・帝国主義とその国家をそのままにおいて、ただ政策転換をブルジョア政府にせまるものであり、そのために国会で多数をとり内閣を組織するというものに他ならない。

しかも、こうした階級闘争と政治闘争との歪曲は、第一には「反戦・平和・民主主義」を超階級的にとりあげ、それを「段階理論」にもとづく運動論で位置づけることによつて、第二には組合主義者と結びつくことによつて、よりいっそう全面的に仕上げられている。

組合主義者は、政治闘争を経済闘争にしたがわせ、労働者階級の状態改善を自己目的化して、社共と結びつき、議会に圧力を加えることを立場としている。これにたいし社共は、組合主義者のこの立場に全面的に押陣し、それを議会主義路線のもとで自己の票に結びつけることを基本としている。

もちろん、われわれは、経済闘争、改良闘争を闘う。しかし、それを自己目的化するのではなく、国家権力をめぐる政治闘争に従属させる。従属させるといふのは、労働者の状態の改善・改良が労働

つ々の闘争陣型である。ブントの分裂・解体によつて、これは消滅しているが、もう一度その意識性を復権することが必要である。

だからといって、今、「中央権力闘争——マッセンスト」を追求すべきだということではない。今、われわれが断言しえるのは、政治闘争・武装闘争の矛先を、中央集権のブルジョア国家機構の破壊に向けていくことで、各地方・地域の運動を単一の階級闘争に再編していくことである。

3 あらゆる闘争形態につうじていなければならぬ

今日、中核派等は、社共と自己の区別を、もっぱらではないとしても、主として闘争形態においている。そして、非合法的な闘争手段こそ、革命的であるかのごとく考えている。これは、ブルジョアジーがとくに合法舞台（例えば議会・労働組合）で労働者をだまし、愚弄していることから、経験の浅い革命家がよくおちいる誤りと同じである。「だが、非合法的な闘争形態をあらゆる合法的な闘争形態と結びつけることのできない革命家は、きわめて質のわるい革命家である」（『共産主義における「左翼」小児病』P—一三国民文庫）。プロ独と権力奪取を目的意識的に準備せんとするプロレタリアートの革命党は、社会活動のあらゆる形態、あらゆる方面につうじていなければならぬだけでなく、あらゆる闘争形態（武装闘争、街頭カンパニア、組合活動、議会）につうじていて階級情勢の転換に対応する能力をもたなければならぬ。

中核派の諸君を見ると、なるほど地方自治体のいくつかの選挙闘争や動労千葉などを握っている。しかし、そこでの社共との区別は、

三里塚闘争への参加や、対「カクマル」戦にしている。この欠陥は武装闘争についてもいえる。

武装闘争を、われわれは現在の日本のプロレタリアートの階級闘争の一部として、国際的「内戦・蜂起・革命戦争」とともに完全に承認し、自らもそれを組織していくべきだと考えている。武装闘争は敵を直接的に殲滅し、味方を保存し、強めるためのものである。したがって、どのような小規模な武装闘争であれ、ブルジョアジーとその国家機構に向けられる必要がある。

中核派の諸君の武装闘争は、敵对党派へのテロルを除けば、ほぼ完全に宣伝のためのものである。もちろん、武装闘争を宣伝することとは必要であるが、そのことと、宣伝のために武装闘争をおこなう

ことは別のことである。彼らの武装闘争を、「宣伝のための武装闘争」だと判断するのは、それでもって組織と運動を統制する手段としていふからである。それは、プロレタリアート全体を強めず、弱める結果となっている。

武装闘争は現在のには、国際主義の実践、権力奪取の実践的準備ということに厳格に統制していく必要がある。同時に、「この闘い（武装闘争）に参加し、先頭に立ち、自己と労働者階級・人民を教育し、訓練し、武装すること」が求められている。革命を確実に準備していくために、このことをプロ独の準備と結合させて労働者大衆の政治的自覚、判断力、行動力、武装を発展させていくこと、これこそ、われわれが考え、追求しなくてはならないことである。

パンフレット好評発売中

新しいインタービュー口をめざして

建党にたいするわれわれの考えを明らかにした論文集

五分冊パンフ

- 第一分冊 綱領原則前半部
- 第二分冊 綱領原則後半部
- 第三分冊 ソ連の評価について
- 第四分冊 帝国主義批判と民主主義問題
- 第五分冊 「プロレタリア独裁」創刊号、その「綱領」批判

侵略、反革命軍事力の増進を
防衛白書

はじめに

八四年度『防衛白書』(以下『白書』とする)が昨年
版につづいて「ソ連脅威」を展開し、侵略反革命軍事力
の増強に色どられてゐるのは周知の通りである。
日帝・中曾根内閣の軍事大國化がいつそうあしすめら
れていくのは火をみるよりも明らかだが、いま米帝・レ
ーガン政権との関係をより強めながら、朝鮮・アジア、中
東、中南米等への独自権益の拡大を帝国内閣軍事力の増強
を背景としてさらにくりひろげんとしているとき、『白書』
を一瞥しておくことは一定の意義がある。

一 国際帝国主義—日帝
の軍備増強成果を
披露する『白書』

「米帝を始めとする自由主義諸國は、国防努力を絶
し、…その効果も徐々に表れつつある」(『白書』
『第一部—国際軍事情勢』)
昨年の『白書』では「軍事バランス、東側に有利」とし
ていたことからすれば、この一年の帝国内閣の「国防努力」
がいかにもすさまじく展開されたかが表明されている。こ
こには、米帝を中心として世界全域にくりひろげられた国

際帝国主義の侵略反革命行動の「実績」に裏打ちされた：
自負：が示されていよう。そしてまた日帝の「軍事空港の
拡大・拡充をふくむ軍大化を強権のもとにおしすまめんと
する：自負と決意」が示されていよう。

二 「ソ連」脅威の増
大」のまやかし

「わが国周辺地域においては、極東ソ連軍の著しい増
強とこれに伴う行動の活発化によって、わが国に対す
る潜在的脅威が増大している」(同前)
国際帝国主義に有利な軍事情勢への転換を誇示したあと
にこの一頂がある。：増大：の自身は軍事力の量的推移で
あり、「ソ連は、帝国主義が存在する限り戦争の危険は回
避されないとの認識へにある」という指摘である。
たしかに、ソ連の軍事力は増大しつつあった。とこ
で、「わが国周辺」—「極東ソ連軍の著しい増強とこ
れに伴う行動の活発化」は一九六九年三月の中ソ国境紛争
を直接の契機とする。そして、中国共産党の、「三つの世
界論」に示される世界戦略は基本的に変わっておらず、ま
すます米帝軍事との関係を強めつつあるのが現状である。
こうした、「政治の継続」としての軍事の目的・内容

三 日本共産党の『白
書』批判の反動性

「『防衛計画の大綱』をふみこえる軍事増強路線を一
段と鮮明にするとともに、…アメリカがひきあこ
す戦争に自衛隊が参戦するための準備体制強化を前面
に打ちだしました」(『赤旗』一九八四年九月一五日
号)
「アメリカ『有事』に、日本国民を総動員する態勢を
強化する中曾根内閣の参戦準備計画の急テンポな推進
を企画するものである。…反トマホークの日本配
備を許さないたたかいますとするとともに、日米軍事
同盟の廃棄、非同盟・中立の日本の実現による平和と
安全の眞の保障をさして奮闘する」(同前 中光雄

・衆院安保特別委員

日本帝国主義を美化・免罪する日本共産党は、諸垂の根元は米帝にありという。彼らの行動綱領の「型」からは、日米軍事同盟の「廃棄」が日米戦争として成立しうることや、朝鮮「有事」へ米帝以上に深く食いこんでいる日帝独自利害関係が捨棄される。それは、あれこれの政策・内閣の変更でプロレタリア・勤労人民が資本の鉄鎧から解放されうるかのごとき幻想をふりまいてはいるばかりではなく、朝鮮・アジアで広範にわきあがり激化している反日運動に敵対している。

こういった彼らであればこそ、日帝の軍備増強を正当化する論拠となっている「ソ連の脅威（の増大）」に一言もふれずに済ましうるのである。いや、彼らは自身の見地を示している。

「ソ連の：脅威」を昨年より具体的に強調しつつ、

・「（同前、三浦一夫）」

こういった日帝批判の穴落全体からは、「反トマホークの日本配備を許さないたたかい」も軍大化のテコとなるのが道理である。

一九八一年以降、米帝は中東・インド洋に常駐体制を敷いている。その中心となっているのがカールビンソン・エンタープライズである。日帝は、独自の利害から「資本

輸出のため、原料のため、商品市場のため等——これら艦船の日本母港化を突進的・積極的に推進してきている。経済権益と軍事・外交展開は固く結びつき、あいつく日本を軸とした共同軍事演習は三軍統合指揮所演習・実動演習を本年中に遂行せんとするほどに至っている。

「防衛計画の大綱」の水準や防衛費の「対GNP-%枠」の問題を軍事力の量的側面からとりあげる傾向は、こうした日帝の侵略反革命政治の延長としての軍大化を一面化することになる。帝国内（資本主義）の批判ではなく「防衛費を削って福祉・教育等の充実」といったスリカエによってプロレタリア・「人民」を動員することは、一国的な利己主義を強め、侵略反革命との闘争からの退却を結果せしめる他はない。

「防衛計画の大綱」の装備水準がすでに突破されているとみるむきもあるように、日帝の軍備増強は急テンポですめられてきた。このこととあいまって、「わが国周辺空海域」も拡大させられてきた。

これは、「防衛計画の大綱」形成時の「わが国周辺地域においては、米・中・ソ三国間に一種の均衡が成立している」といった国際帝国主義—日帝の：情勢分析の転換を示し日帝の軍事プレゼンスのアジア・中東・中南米等への事実上の拡大となっている。「防衛計画の大綱」の装備水準そ

のものごとりあげるのがいかに無力であるかが明らかである。

他方、防衛費の「対GNP-%枠」の点ではどうか。昨年の防衛費は対GNPO・九九-%と予算計上されたが、ペアのはね返り分を上積みすれば-%は突破されている。ただし、GNPそのものを「上方修正」すれば「-%枠」は維持される。日帝—中曽根内閣が今年度の防衛予算を「-%枠」内にとどめようとしているのも、こういった帝国主義の常道ベテンがあるからであり、「-%枠」の突破が大々的にとりあげはじめられた要因のひとつである。低成長：が「上方修正」されてきたからでもある。

以上からしても、「防衛計画の大綱（水準）」や防衛費の「-%枠」といった政治的焦点となっている問題は、現実の国際帝国主義の経済・政治（—外交）・軍事の実際をふまえることが不可欠である。日帝が「総合安保構想」なるグローバルな侵略反革命・軍事を展開しつつある今日において、例えば、「-%枠の突破は必至である」といった

アジアシジョンでプロレタリア・勤労人民への階級的宣伝・扇動をなしうると考えるのは幼すぎるであらう。

日帝の軍大化攻勢が、社会帝国主義「者」—日本共産党によっても補完されているのは疑問の余地はない。

四 われわれの闘い

国際帝国主義—日帝の侵略反革命戦争軍事にはプロレタリアートの革命戦争軍事があるのみである。

国際帝国主義—日帝打倒をプロレタリアートの国際共同行動のもとにおしすすめ、プロレタリアート独裁を階級の廃絶まで責任をもつ武装した非合法党建設に、インシアチブを形成・発揮していかんとする闘いこそが、この闘いをプロレタリア・勤労被搾取人民を広範に参加させていくとこそが、勝利の要である。

（破昭間 進）

帝国主義的労働統一攻撃の現局面と

共産主義者の任務

現在の帝国主義的労働統一攻撃は、「中道諸派による新翼賛党形成と結びついていることにみられるように、ブルジョア統治制度再編の一環として存在する」(パンフ『労働統一問題によせて』)。

七〇年代末以降急速に強められてきた帝国主義的労働統一攻撃において、同盟・J.C.は「『労働統一』の青写真を、民同先行の統一を八二―八三年に設定し、官民統一を八五年におくと提起」(同)してきた。具体的には、八二年五月「基本構想」発表、十二月「全労協結成として進んでいる。それは、革命党建設の立ち遅れや、総評幹部の保身策に助けられて着実に成果を上げていくかみえる。しかし、決してそうではない。この攻撃は、日帝の侵略・反革命・抑圧や議会・裁判所・官僚機構・軍隊・警察等の再編と結びついている。これは他でもなく、労働貴族(官僚)どもへのヘゲモニー争い、および下部組合員の抵抗にあり、矛盾・軋轢を深める結果になっている。十月十五日の全労協会議(代表者会議)ではつぎのようなことが述べられている。

「このままでは下手をする」と現在の労働四団体から労働五団体へと、労働界がますます複雑になるのではないか」「全労協は政策

現在、彼らは「全労協」という「ゆるやかな協議体」から、「①綱領・憲章(基本構想)、②規約(運営要綱)、③運動方針、④財政、⑤事務局体制、⑥地方体制」(「八五年の活動方針案」)をもって「連合体」への移行を主張しはじめている。そして、同活動方針案では移行のあかつきは、「国際自由労連」へ加盟するとしている。

これにもとづいて、十一月十四日の全労協第三回総会では、全労協を連合体へ移行するための「連合組織検討委員会」の設置を決定した。この委員会の任務は、先のことと共に「連合組織と既存ナショナルセンターとの関係」「労働界全体の統一への展望」向う一年かけて検討することとされている。移行の時期については、八七年をメドとして、総評・同盟で調整するとしている。

総評中央はこれを受けて、「五項目補強見解」を来年早々にも「今日の意味に整理する」とし、バスに乗り遅れまいとする態度をとっている。

これにたいし、民同左派の部分は労研センターや、全国労組連をつくって対抗せんとしている。彼らの特徴は、組合現場での活動や地域での活動を対置することにある。これは、全労協がもつたら労働貴族・官僚どものボス交による「上からの統一」として進んでいることとたいして一つの有効性をしめしている。しかし、同時に、彼らの欠陥にもなっている。

それは彼らの代表である総評三顧問や、労組連の指導部分にみられるように、労働組合それ自体での議論や運動のあり方、および政治闘争を経済闘争に従属させる点としてある。もちろん、労働組合やその運動のあり方を議論することが問題なのではない。問題は、

制度の運動を中心に、いや賃金闘争こそ重点に、など多くの心配や注文が寄せられている」。

五〇年代中期以降の労働組合運動は、総評・民同による「春闘」を中心としてきた。これは、労働運動を経済主義的に歪曲しようとしたものであり、労働貴族どもの組合支配の強化と結びついている。しかし、労働者大衆が経済闘争としてではあれ、同時に「決起」する体制を作ったことは、いわゆる民同左派といわれる戦闘的組合主義者を混在させることになった。全労協は主としてこの現実を意識しながら、「反共」「労資協調主義」を全面に掲げ、共産主義思想の持主と同時に、かかる民同左派等のバネを策動している。

もちろん、ここでの攻防は、どちらが多く組合員を獲得するかにかかっている。全労協の側は、その反共・階級協調という本性からいっても、運動論的にはなかなか対抗しえないという欠陥もっている。彼らの特徴は、資本と癒着して「労働力商品」の売買交渉権を握り、イデオロギー面と、機関決定による組合員統制の強化を武器としている点にある。したがって、彼らはあくまで強気で進むしかない。

それを共産主義のイデオロギーや、革命党建設と切り離している点にある。

周知のごとく、労働者の組合への団結は、十八世紀のヨーロッパで労働者の自然発生的闘いから始まり、資本主義の帝国主義段階への移行(超過利潤による労働者上層の買収)および、革命党建設の発展と関連して多くの労働組合の反動化が進んでいる。また帝国主義戦争とロシア革命を契機に、労働者党そのものが分裂し、労働組合の系列化が進んでいる。

こうしたことを考慮するならば、労働者の真の階級的統一は、共産主義革命の側、革命党の側へ労働者大衆を獲得する闘いの結果としてはじめて可能なことが明らかである。それは基本的には、ブルジョア国家機構を破壊し、労働者階級が支配階級となること(プロ独の組織化)を不可欠とする。

ところが、民同左派の諸君は、革命党建設が立ち遅れ、共産主義運動が分裂(国際的にも国内的にも)しているという現実を拝見し、この事態を根本的に打開する闘いを観念化し、他方で組合運動の狭いリアリズムを理論化せんとしている(組合綱領論議)。ここにこそ、彼らの議論がどうどうめぐりになり、同盟・J.C.とだけでなく、総評中央の労働官僚とさえ有効に闘争しえない根拠がある。

もとより、これは彼らの問題というより、共産主義革命の側、革命党の側の問題である。この点で、日共・統一労働組の破産を教訓化しておくことは特別重要である。

日共の統一労働組運動は、選挙に労働者を動員することをめざし、六九年に大阪で始まり、「革新」自治体等形成で一定成功した。しかし、七〇年代後半にそれはゆきづまる(七六年総選挙での二一議

席滅、同年京都知事選敗北、七九年大阪知事選敗北)。これは、ブルジョア側の側、中道諸派の側が、日共排除の連合政権構想を前提に帝国主義的労働統一攻撃が強められてくることに照応していた。これにたいし、日共は八〇年代に入って以降、統一労働運動を「新しい階級的ナショナルセンター」の推進主体として主張しはじめていく。これが、いわゆる今日の統一労働運動の歴史的背景である。

以上から明らかごとく、今日の統一労働運動は、選挙に労働者を動員するための「革新統一戦線」としての統一労働運動が破産したことを根拠としている。しかも、その位置づけは、この数年においてもシグザグしている。

八〇年代の初頭は、「労働の階級的統一」「階級的ナショナルセンターの確立」の「土台」として統一労働運動を位置づけている。ところが最近では、同盟・総評等とならんだ今一つのナショナルセンターとして位置づけられつつある。これは、統一労働運動が「労働の階級的統一」としての「階級的ナショナルセンター」の「土台」たりえなかつたことの一つの証明である。

こうして、今日の日共の「統一労働運動」路線は、帝国主義的労働統一攻撃にたいして、左翼だけで組合をつくって対抗するということに帰結しつづがある。この左翼組合とは共産主義運動が分裂している以上、一般的ではなく日共系活動家が執行部を握った組合で組合員を囲い込むものである。これはまさに、歴史的に敗北した道である。古くは戦前の「全協」が産業報国会の前にまったく無力なまま破壊されたこと、戦後の「産別会議」が産別民同の発足、総評の結成に自己解体したことにしめされている。

もちろん、今日のように帝国主義の側からの労働の分裂と系列化が進んでいることからして、部分的、例外的には左翼組合の形成を否定することはできない。しかし、それを特別の理論にまとめあげるのには誤りである。

先にも述べたように、現在の帝国主義的労働統一に對抗するためには、どのような反動的な組合でもあらゆる方法で革命的宣伝・扇動・組織活動をおこなひ、労働者大衆を共産主義革命の側に獲得すること、その闘いをとうして労働組合の指導部を共産主義者でとつてかえることが必要である。これは、労働の組織的統一（少数は多数に従う）を守ることを原則として、系統的にねばり強く闘うこと（そのためには組合内に党細胞をつくって闘かわねばならない）を要求する。この闘いの代りに、左翼だけの組合をつくって分裂することは、反動的組合の中での大衆にたいする直接的働きかけの放棄を意味する。

日共の組合政策は、一方では日共自身の闘いを労働組合に押しつけること、他方では日共の労働組合の指導化を結果する。しかし、必要なのはあくまで、特定の理想にもとづく党の闘いをやりぬき、組合運動との緊張関係をつくり出すことである。

共産主義者の任務は、現在の帝国主義的労働統一の具体的あらわれの一つ一つを資本主義・帝国主義の本性と結びつけて暴露していくことが重要であることはいうまでもない。と同時に、労働者階級の経済的解放をめざし、ブルジョア国家機構を破壊しプロ独を樹立するために革命的な政治闘争を組織し、それによって経済闘争を革命的に再編（労働者の精神的、肉体的退廃を防ぎ、真の階級的団結の条件のための闘い）していくこと、これをもって組合を党に接近さ

すことにある。この原則的闘い以外に、帝国主義的労働統一攻撃を粉砕し、真に階級的な労働統一をつくり出す道はない。

『火花』第四〇号の終正

P 六上段十二行目

なにの役割も果さなかつた

なんの役割も果さなかつた

P 十二下段十九行目～二一行目

その指導部と手を切るよう呼びかけることを意味するだけでなく、横堀派の活動家

その指導部と手を切るよう呼びかけることを意味する。われわれは、この立場から、第一公園派系のメンバーに働きかけるだけでなく、横堀派

P 十八上段二行目

大衆への開放をうたって

大衆への開放をうたって

P 二四九行目

第三分冊

第四分冊

研究ノート
労農独裁と永続革命

目次

- I はじめに
- II トロツキーの亡霊
- III 革命の道すじか、革命の戦術か
- IV 対馬忠行の調停主義
- V 黒カン氏のスコラ談議
- VI プントの現実主義（以上三九号）
- VII レーニンのプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁
- 1 臨時革命政府の問題とプロレタリアートと農民

- 民の革命的民主主義的独裁
- 2 「二つの戦術」にみるボリシエヴィキ派とメンシエヴィキ派の戦術観の相違（以上四〇号）
- 3 プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁とは何か（本号）
- 4 トロツキーの永続革命論の批判（以下次号）
- VIII ストルイピン反動期におけるレーニンのプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁
- IX 四月テーゼとレーニンのプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁——二重権力とは何か

3 プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁とは何か

プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁という戦術スローガンはなぜ、進行する革命に現実を止揚する方向を刻印することを可能にするのか、なぜ、当面するブルジョア革命を最後までおしすすめ、プロレタリアートの革命へと発展させていくことを可能にするのか、かかる意味でなぜ、党の果たすべき任務を表すスローガンなのか。

われわれは本誌第19で情勢分析についてのレーニンの態度がどのようなものであったかをみた。かのノートで示されたことは、レーニンの場合、情勢分析は、普通考えられているもの——それこそスターリン以来連綿と続き、今日多くの大衆団体にまでまん延している。情勢分析、そして任務、という二元的なものでは決してなく、つまり、情勢分析が任務とは直接結びつかない客観主義的解釈（世のなかの）、静態的狀態を示すものでは決してなく、当面する政治時機における諸階級・層の間の相互関係、およびそれらの国家との関係を厳密に評価しつつ、党の任務と直接に、密接不可分に結びつき、闘いへの呼びかけを直接に支えているということによって、情勢分析それ自体がプロレタリアートにたいする宣伝（煽動）文章——プロレタリア大衆にむかって彼らを組織するための謂わば「呼びかけ」となっているということであった。レーニンはこのこ

とを「現にあるものにもとづいて、ではなく、絶対正確に確かめられたものにもとづいて党の戦術・任務をうちたてる」というふうに語っている。例えば、前号に引用した「臨時革命政府についての決議」でいえば、（一）（二）（三）の部分で「情勢分析の部分であるが、これを読めば、いま述べたことがよくわかるであろう。（以下に再度引用しておく）」

（一）プロレタリアートの直接の利益も、社会主義の終局目標をめざすプロレタリアートの闘争の利益も、できるだけ完全な政治的自由を要求しており、したがって、専制的統治形態を民主共和制でおきかえることを、要求している。／＼（二）ロシアにおける民主共和制の実現は、勝利した人民蜂起の結果としてのみ可能である。この人民蜂起の機関が臨時革命政府であり、これのみが選挙煽動の完全な自由を保障することができ、また秘密投票による普通・平等・直接の選挙権にもとづいて、人民の意志を真に表明する憲法制定議会を招集することができる。／＼（三）ロシアにおけるこの民主主義的変革は、ロシアの現在の社会経済制度のもとでは、ブルジョアジーの支配をよわめず、これをつよめるであろうし、ブルジョアジーは、ある瞬間には、なにもにも躊躇することなく、ロシアのプロレタリアートから革命期の獲得物のできるだけ多くの部分をうばいとり、かならず試みるであろう。

この点は、情勢分析のレヴェルだけでなく、より原理的なレヴェルのもの、例えば、プロレタリアートが唯一革命的であるとレーニンがくりかえすところにもあてはまるものであった。レーニンは資本制生産様式の何たるかからこのことを言明し、現実の階級闘争の実際の資料によってそれを裏づけつつ、このことを具体的な階級闘争場裡での党派闘争の武器—プロレタリアートの組織化のための武器として、それゆえプロレタリア大衆への呼びかけ、そういつてよければプロレタリア大衆を政治的に鍛え、教育していくものとして提示している。だから、プロレタリアートがただひとり革命的だ、というとき、それは、単にプロレタリアートの存在論的規定を与えたのではなく、秘密にそれに立脚しつつ、党の果たすべき任務にひきつけて提示されているということであった（五分冊パンフ 第一分冊参照）。

このことは、戦術（任務）のほうから情勢分析をみたときも同様にいえる。つまり、戦術は情勢分析と密接不可分であり、任務を規定し、可能にする現実的根拠が成熟していることがそのうちに語られているのである。

いま問題としているプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁についても見る場合も、このレーニンの態度をはっきりと確認することができる。プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁というスローガンは、当時のロシアの階級情勢一般に秘密に依拠しているとともに、また現に進行しつつあった革命の現実—プロレ

タリアートと農民の闘いの具体的内実、闘争形態—を鋭くとらえたものであるとともに、かつ同時に、そうした革命の現実を止揚するプロレタリアート—党の任務を示すものであった。それゆえにこそ戦術スローガンであった。では、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の戦術スローガンはいかなる現実に立脚して提示されたか。箇条書きにしてみる。

(α)

①全人口の圧倒的部分を占める農民—しかも生産手段をほとんどなにももたない貧農。

②ほんの一握りの巨大地主の存在。

③人口のうちではなお少数だが、資本主義の発展に伴ない急速に伸長するプロレタリアート。

④広汎に封建的諸関係を残した社会経済制度。

⑤④に照応したツァーを頂点とする軍事的専制体制—その実体としての官僚制と軍隊。

⑥もともと初歩的なブルジョア民主主義さえ許容しない軍・官僚機構による抑圧体制—社会の監獄化。

(β)

①もともと抑圧され、打ちひしがれている農民の政治的無自覚さ、組織性の著しい低さ。

②しかし、革命の進展に規定された農民の政治的覚醒の拡大（教育と訓練）、農民のツァーにたいする信頼の崩壊と、地主への隷従

からの脱却志向の急速な増大、土地奪取闘争等の自然発生的闘争の展開、農民委員会的な諸組織の発生、農民政党への志向の増大、プロレタリアートとの共闘の試みと共同闘争機関の発生。

③一九〇五年一〇月に結成されたカデット党をその党とする自由主義的ブルジョアジーの政治的進出と、革命にたいするブレーキ役の遂行。

④プロレタリアートの闘争の急速な発展—ロシア社会民主党の組織活動、それに先立つナロードニキとその末裔による非合法地下活動の経験の蓄積。組織されたプロレタリアートはなお少数だが彼らを核とした政治闘争の拡大。

⑤ゼネスト、街頭デモンストレーションから武装蜂起への発展。闘いの高揚に規定された労働組合等の実質的合法化の獲得、様々の合法的大衆運動・諸組織の発展。

⑥革命進展のなかでのプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の萌芽機関の発生—さまざまなソヴェイト等。プロレタリアートと農民 兵士との共闘の展開。

かくして、革命の進展は、樹立されるべき国家権力が、プロレタリアートと農民との双方からその階級性を刻印されるものたること、そうでしかありえないことを示す、とともに、その国家はツァーリ政府を打倒する革命によって生みだされるものとしてプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁でしかありえず、またそれとして実現しうるものであり、更に、それとして実現せねばなら

ないものである。このようにプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁は、ロシアの階級関係一般からだけでなく、進行中の革命の全経験—とりわけプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の無数のあれこれの試み・萌芽をとらえ、それをはっきり定式化し、促進し、全体化するためのものであった。しかもそれだけではない。樹立される国家権力がプロレタリアートだけの独裁ではありえず、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁でしかありえないことを厳然と明らかにすることによって、そこにおいてプロレタリアートは決して独自性をすててはならず、プロレタリアートの独自の利害を守り抜き、このプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁を止揚し、と、抜き、つまり、プロレタリアートの独裁の樹立に向け闘わねばならないことを示しているのである。プロレタリアートの独自性をはっきり刻印するためのスローガンとなっているわけである。

革命によって実現される国家の階級的内容はプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁でしかありえないという階級情勢の把握と結びついて、革命によってプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁を樹立しうる、革命のなかでプロレタリアートはヘゲモンとして登場し、農民をしがえてプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁を樹立しなければならぬ、そうすることにによってプロレタリアートはプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁を止揚する条件をその手にしっかりとつかまねばならぬ

—このように、一個四重の内容がこの戦術スローガンのうちにこめられているのである。

この四重の内容についてより詳しくみよう。
革命が直接日程にのぼせているのは、「全人民的憲法制定会議を招集する問題」(二つの戦術)『全集』p.6)であり、この問題にたいして、三つの政治潮流が存在していた。第一は、ツァーリ政府そのものであり、「人民代表を招集する必要があることを認めてはいないが、しかし、その議会が全人民的なものに、また憲法を制定する議会になるのを絶対に認めるつもりはない」(同)、第二は革命的プロレタリアートであり、「社会民主党の指導を受けているかぎりには、権力を憲法制定議会に完全に移すことを要求し、そのために普通選挙権を求め、煽動の完全な自由を求めるだけでなく、さらにツァーリ政府を即時打倒しこれを臨時革命政府にかえようと努力している」(同)。最後は自由主義的ブルジョアであり、「ツァーリ政府の打倒を要求せず、臨時政府のスローガンをかけず、・・・実際は、ツァーリと革命的人民とのできるだけ平穏な取引を、しかも彼らブルジョアには最大の権力が与えられ、革命的人民、すなわちプロレタリアートと農民には最小の権力しか与えられないような取引を、求めている」(同)。(このように階級情勢をとらえること自体がプロレタリアートにたいする宣伝であり、プロレタリアートにたいして革命のヘゲモンたれとの呼びかけを孕んでいるのである)

革命の階級的内容はブルジョア的なものであり、この点をロシアの「マルクス主義者は、無条件に信じている」(同p.36)。だが、革命の階級的内容がブルジョア的であるからといって「民主主義的変革(その社会経済的内容からいえばブルジョア的な変革)は、プロレタリアートにとって非常に大きな利点にならない、という結論はけつしてでてこない」(同p.37)。そもそも「ブルジョア革命とは、ブルジョア的な、すなわち資本主義的な社会経済体制の枠をこえない革命である。ブルジョア革命は、資本主義の発展の諸要求をあらわしているものであって、資本主義の基礎を廃絶しないどころか、反対に、それをひろげ、ふかめるものである。だから、この革命は、労働者階級の利益だけでなく、全ブルジョアの利益をもあらわしている。資本主義のもとでは労働者階級にたいするブルジョアの支配は避けられないから、ブルジョア革命はプロレタリアートの利益よりもむしろブルジョアの利益をあらわしている」と言うのはまったく正当である」(同)。しかし、「ブルジョア革命とは、旧時代の残存物、農奴制の残存物(専制だけでなく君主制もこうした残存物の一つである)をもっとも断固として掃蕩するような、資本主義のきわめて広範な、自由な、急速な発展をもっとも完全に保障するような、まさにそういう変革なのである。だから、ブルジョア革命は、プロレタリアートにとってこのうえなく有利である。ブルジョア革命は、プロレタリアートのために無条件に必要である。ブルジョア革命が、完全に、断固たるものであればあ

るほど、それが徹底したものであればあるほど、社会主義をめざすプロレタリアートのブルジョアとの闘争は、それだけ確実になるだろう」(同p.38-39)。だから、プロレタリアートはこの民主主義的変革の先頭にたつて闘い、ブルジョア革命が最後まで闘い抜かれるようにしなければならぬ。というのも、「ブルジョアは、ブルジョア民主主義的な方向での必要な改革が、より緩慢に、徐々に、慎重に、決断を欠いたやりかたで、革命の道をとらずに改良の道をとっておこなわれるほうが、有利」(同p.39)だからである。メンシェヴィキはこの点でのプロレタリアートの任務を曖昧にする。メンシェヴィキは革命の階級的内容がブルジョア的だというところから自由主義的ブルジョアを革命の主導者とみ、プロレタリアートを革命にたいする第三者の立場におこうとし、かくして実際上はプロレタリアートを自由主義的ブルジョアの後尾につかせんとするのである。

かくて、「問題の核心は、・・・革命が真に壮大な勝利に終わるか、それともみじめな取引に終わるか、この革命がプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁に到達するか、それとも自由主義的・シポールの憲法で『力尽きてしまふ』か、という点にある」(同p.42)。メンシェヴィキはここでも観照主義者になる。自らの任務を規定するのではなく、第三者の立場があるかのように考え、革命を解釈する。

革命の可能なこの二つの結末からして、ブルジョア民主主義一般

を問題にするだけでは決定的に不十分であり、当面する革命が徹底したものであればあるほど有利である「共和主義的なブルジョア民主主義派」と、革命が中途半端に終わることの方により大きな利害を見出す「君主主義的自由主義的なブルジョア民主主義派を区別」(同)しなくてはならなかった。ところがメンシェヴィキは、「革命のブルジョア的性格について論じるだけにとどまって」おり、「現在の革命に民主主義的指導を与え、ストルーヴェ氏一派の裏切りのスローガンとは違った先進的な民主主義的スローガンを強調し、地主や工場主の自由主義的プロカー商売とは違ったプロレタリアートと農民の革命的な闘争の当面の諸任務を端的に鋭く示すことが問題になっているときに、『あい対立する諸階級がたがいに関争する過程』についての陰気なおしゃべりで満足しているのである」(同)。

ところで革命的共和主義的ブルジョア民主主義派の「分子は、農民のなかにもっとも多い。・・・大きな社会的集団をその政治的傾向にしたがって区分するばあいには、革命的・共和主義的民主主義派と農民大衆とを同一視してもたいして誤りではない」(同p.39)。「農民のなかには、多数の半プロレタリア分子とやらんで小ブルジョア分子がふくまれている。このことが農民をも動揺的にし、プロレタリアートが秘密に階級的な党に結束しなければならぬようにする。しかし、農民の動揺性はブルジョアの動揺性と根本的に違っている。というのは、農民は、現在では、私的所有

を無条件に擁護することよりも、むしろこの所有の主要な形態の一つである、地主の土地をとりあげることによる利益を感じているからである。農民は、それだからといって社会主義的になりはしないし、小ブルジョア的でなくなりはないが、民主主義革命の完全な、きわめて急進的な味方になることができる」(同p.33)。

ポリシエヴィキはプロレタリアートがかかる農民に働きかけ、領導しなければならぬ、とプロレタリアートに向けて提示する。メキシコヴィキはブルジョア民主主義派の二派を区別せず、革命にたいして親照主義的態度をとるので、結局自由主義的ブルジョアジーに、地主に追随することになる。

「『ツァーリズムにたいして決定的勝利』をおさめる能力をもつ勢力でありうるのは、人民、すなわちプロレタリアートと農民だけ——農村や都市の小ブルジョアジー(これもやはり「人民」である)をこの双方に配属させて、基本的な大きな勢力をとりあげるなら——である。『ツァーリズムにたいして決定的勝利』とは、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁である。・・・このような勝利は、まさしく独裁であろう。すなわち、その勝利は、『合法的な』『平和的な方法で』つくりだされたならその機関に立脚するのではなくて、かならず武力に、大衆の武装に、蜂起に立脚しないわけにはいかないであろう。それは独裁でしかありえない。なぜなら、プロレタリアートと農民にただちに、ぜひとも必要な改革の実現は、地主からも、大ブルジョアジーからも、ツァーリズムか

らも死にもぐるいの抵抗を呼びおこすからである。独裁なしには、この抵抗を粉碎することも、反革命的企画を撃退することもできない。しかし、それは、もちろん社会主義的独裁ではなく民主主義的独裁であろう。この独裁は、資本主義の基礎に手をふれることはできないだろう」(同p.45)。

ところで、かかるプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁のより具体的な根拠はどこにあるのであろうか。革命の進展はこれを可能にする根拠をどういうかたちで生みだし、成熟させていたであろうか。これこそ第一にソヴェトであり、大衆の創意工夫によって生みだされた種々様々の機関であった。当時のドキュメントを少しはトロツキーに敬意を表するために、彼の著書から抜きだしてみよう。ペテルブルグのソヴェト議長であったトロツキーはソヴェトがプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の政府の萌芽であったことを生き生きと描いている。

「一九〇五年」十月十日、最大のストライキが始まろうとしていた時点で、ペテルブルグの社会民主党両組織のうちの一方が、労働者の革命的自主管理機関の設置を協議した。十三日夜にはすでに工業専門学校の建物で、将来のソヴェトの第一回総会がもたれた。出席した代議員はせいぜい、三〇ないし四〇名であった。首都のプロレタリアートに政治的ゼネストと代議員選出をただちに呼びかけることが決定された」(『一九〇五年』第二期選集 Vol.5.p.112)

「十月十五日、繊維工業の工場はまだ大部分が動いていた。ストに入っていない労働者をストに引き入れるために、ソヴェトは説得から実行にいたるまでの全段階の手段を編み出した。しかし過激な手段に訴える必要はなかった。印刷物による呼びかけが役に立たないところには、スト決行中の者が集団をなしていけば、そして時には数名でも行けば、それで十分だった。そうすれば仕事は止まった。／＼私はベクリエ工場の傍を通りかかった」とある代議員はソヴェトに報告している。「見ると工場は動いている。呼鈴を鳴らす。『ソヴェトの代議員だと伝えてください』——『ご要件は?』と工場長は尋ねた。『ソヴェトの名において、あなたの工場の即時閉鎖を要求します』——『よろしい、三時に仕事を停止いたします』」／＼十月十六日になると繊維工業の工場はすべて、もうストに突入していた。商業は市の中心部を除いてすべて停止した。労働者街ではすべての店舗が閉鎖された。ソヴェトはストを拡大しつつ、自分自身をも拡大し堅固なものにしていった。スト決行中の工場はそれぞれ代表を選び、必要な委任状を与えて、ソヴェトに送り込んだ。第二回総会には、四〇の大工場、二つの製作所、三つの労働組合(印刷工・商店員・事務員)の代議員が出席するまでになった」(同p.24)

「ソヴェトの『通報(イズヴェスチャ)』はどのようにして発行されたか。ソヴェトは政府系新聞の印刷所を占拠することによって発行するという闘いを組織した。

「この種の企てとしては最大のことを実行された。『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』の大印刷所の占拠である。／＼『被害者』の描くところによれば、事件のあらましはこうだ。夕方六時頃、新聞印刷所に三人の若い男が現れた。・・・来訪者は支配人に、自分たちは執行委員会の命令で来たのであり、『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』の印刷所を占拠して『通報(イズヴェスチャ)』第七号を印刷するよう指示されている、と告げた。／＼「私はこの件について何も言えない」、と主任は代議員たちに答えた。「印刷所は私のものではない。私としては社長に相談しなければならぬ」。

・・・主任はスヴォーリン「社長」に電話をかけた。彼は・・・出て来ることを拒否し、代わりに編集部の一員であるゴリシチェインをよこした。・・・彼は・・・こう描いている。／＼「どんなご要件でしょう、みなさん」と私「ゴリシチェイン」は尋ねた。／＼若い男のひとり、それには答えず、『通報』の次号を『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』社印刷所にて印刷するというソヴェトの指令書を私に示した。この指令は小さな紙片に書かれており、何かのスタンプが押してあった。『あなたの印刷所にもお鉢が回ってきたのです』、と代表のひとりが私に言った。『つまりどういう意味ですか、お鉢が回ってきたというの?』と私は聞いた。／＼「われわれは『ルーシ』や『ナーシヤ・ジーズニ』や『祖国の子』や『株式報知』で印刷してきた。今度はおたくの番なので、・・・あなたは、スヴォーリンとあなた自身の名において、われ

われが仕事を終るまで密告しない、と約束しなければならぬ」／・・・われわれはみな拘束された。数分後、階段づたいに登って来る大勢の足音が聞こえてきた。事務所のドアにも、玄関にも人びとが立っていた。／占拠が成立した。／三人の代議員はしきりと出入りしたりしてきわめて活発な活動をくり広げた。

／・・・／植字の作業は午前六時に終わった。紙型を作り、鉛版をとる作業が始まった。鉛版用炉を熱するガスがなかった(ストのため)。ふたりの労働者がどこかへ送られ、ガスが入った。商店はどこも閉まっていたのに一晩じゅうたえず食料が搬入された。プロレタリアのためには商店はあいていたのである。午前七時、公的プロレタリア新聞は印刷に入った。人びとは輪転機を動かす、しかも上手に使いこなした。印刷は午前十一時まで続いた。この時まで印刷所は片づけられ、印刷された新聞は荷造りして運び出された。それはいたるところから十分だけ集めてきた荷馬車で運ばれた。・・・警察は夜が明けてから一部始終を聞きつけ、眼の玉を丸くした」(同p.153-157)

では農村ではどうであったか。ここでもトロツキーから引こう。「農民運動が広範な大衆的性格を帯びたのは、十月ストライキ以降のことである」(同p.189)

「ヘルソン県では、農民が大群衆をなして、領地から領地へ、『山分けした』戦利品を荷車に積んで動きまわった。暴力ざたも人殺しもなかった。というのも、農民の要求を聞くや否や、地主

や領地支配人は度肝を抜かれて錠前も門もすべて開けたまま逃げてしまったからである。同盟では、借地料引き下げのための闘争が精力的に行われた。借地料は農民共同体そのものによって『公正さ』に則って定められた。ただし、ベジューコフ修道院からは、一万五〇〇〇デシヤチナの土地が無償で没収された」(同p.180)

「最も激烈な事件は一九〇五年末、サラトフ県で起こった。運動に引き入れられた村々には受け身の農民はひとりもいなかった。だれもが立ち上った。地主は家族もろとも屋敷から立ち退かされ、動産はすべて分配され、家畜は運び去られ、雇農と女中は給料支給のうえで暇を出された。そして締めくくり火が放たれた。襲撃を行った農民『縦隊』の先頭には武装民兵が立った。村の巡査は身を隠し、ところによっては民兵の手で逮捕された。地主の建物に火を放ったのは、地主がしばらくしてふたたび領地に戻ってくるのを不可能にするためだった。しかし、勝手な振舞いは決して許されなかった。農場を根こそぎ破壊したのち、農民は春から地主の土地は『ミール』のものにするという取り決めを行った」(同)

「短時間のうちに全国で二〇〇〇以上の地主屋敷が焼き打ちにあい、破壊された。そのうち、サラトフ一県だけで二七二件に達した。被害の最も大きかった一〇県だけで地主の受けた損害は公式資料によれば二九〇〇万ルーブリとされ、うちサラトフ一県

だけで約一〇〇〇万ルーブリに達した」(同p.191)
こうした自然発生的な闘いとそれまで社会民主党によって地道に続けられてきた地下活動とが結びついた。農民ソヴェトともいえる諸機関が次々と生み出された。

「何年ものあいだ、社会主義諸政党はゼムストヴォ職員を通じて農民のなかに革命的なサークルを組織し、非合法文書を広めてきた。一九〇五年になると煽動は大衆性を帯び、地下から姿を現した。この点でおおいに寄与したのは、請願権まがいのものを制定した二月十八日の愚かな勅令であった。この権利に基づいて、というより、この勅令が引き起こした地方当局の狼狽ぶりに乗じてアジテーターたちは村の寄り合いを招集して土地私有の廃止と国民代表機関の招集を決議するように煽動した。決議に署名した農民たちは自らを『農民同盟』のメンバーとみなし、自分たちの中から委員会を選出したのであるが、そうした委員会は法律で定められた村の当局を完全に押しつけることもまれではなかった」(同p.182)

「八月にはモスクワ郊外で初の農民大会が開催された。二二県を代表する一〇〇〇人以上が集まって、・・・会議を行った。党派・無党派を問わず多くの農民とインテリを結集した全ロシア農民同盟という構想は、この大会ではじめて形態をとって現れたのである」(同p.182-183)

「都市は農村に革命の文書を山と投入し、農民同盟は拡大強化さ

れた。僻遠の地ヴァトカ県では農民大会に二〇〇人が集まり、現地の大隊のうち三個中隊が代表を派遣して共感の意を表明し、支持を約束した。労働者も代表を通じて同様の意志表明を行った。

この大会は、狼狽した当局から、都市でも農村でも妨害なしに集会をもつ許可を取りつけた。ほぼ二週間、県全体にわたって行われた。等々。農民運動の形態はさまざまであったが、全国的に大衆性を帯びていた。辺境ではそれはたちまち尖鋭で革命的なものになった。リトヴァでは、二〇〇〇人以上の代表が集まって行われたヴィリノ大会の決議に従って、農民は郷書記や郡長、国民学校教員を革命的なやり方で更迭し、憲兵やゼムスキー・ナチャリニクを追い出し、民選裁判所や郷執行委員会を設置した」(同p.183)

「農民同盟の第二回大会は十一月六日、モスクワで公然と、しかも公開で開催された。二七県からの代表一八七人が出席した。うち一〇五人は郷会または村会から、残りは同盟の県委員会や郷委員会、地方グループから全権を委任されていた。代表のうち農民は一四五人で、他は農民と接触のあるインテリ、すなわち、国民学校の男女教員、ゼムストヴォ職員、医師などから成っていた。／・・・／討論の中心は戦術問題だった。一群の代表は、集会、決議、当局への『平和的』ボイコット、革命的自治機関の創設、地主領地の『平和的』耕作、納税と徴兵の『平和的』拒否など、

平和裡の闘争を并護した。他の人びと、とりわけサラトフ県代表は武装闘争を呼びかけ、各地で始まった蜂起を即刻支持するよう訴えた。結局中間的な決議が採択された。すなわち『すべての土地を全人民の共有財産とし、自ら家族とともにあるいは仲間と共同で耕すだけが土地を利用できるようにしてはじめて、土地不足の結果生じた人民の悲惨な状態に終止符を打つことができるのだ』とした。また、『農民同盟は、兄弟の労働者、都市・工場・鉄道その他の各組合、勤労人民の利益を守る諸組織と協定を結ぶであろう。人民の要求が貫徹されない場合は農民同盟は農業ゼネストに訴えるであろう。すなわちいっさいの農場主に労働力を提供するのを拒否し、それによって農場を閉鎖するであろう。ゼネストを組織するためには労働者と協定を結ぶであろう』(同p.185)と宣言した。

以上のようなプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の萌芽をポリシェヴィキは一九〇六年の統一党大会(ストックホルム大会)に提出した決議草案で次のように総括した。

「この公然たる闘争において、地方住民のうちの旧権力にたいして断固たる行動をとりうる分子(ほとんどプロレタリアートと小ブルジョアジーの先進的な層だけであるが)は、事実上新たな革命権力の萌芽であった諸組織をつくる必要にせまられた。すなわち、ペテルブルグ、モスクワその他の都市の労働者代表ソヴェト、ヴラデヴォストック、クラスノヤルスクなどの兵士代表ソ

は、(一)自由主義的大ブルジョアジー、(二)急進的小ブルジョアジー、(三)プロレタリアートである。第一のものは、せいぜい立憲君主制のためにたたかうだけであり、第二のものは、民主的共和制のために、第三のものは、社会主義的変革のためにたたかう。完全な民主主義的変革をめざす小ブルジョアジーの闘争を社会主義革命をめざすプロレタリアートの闘争と混同するならば、社会主義者は政治的破産におちいる恐れがある。……だが、まさにこの理由からして、ほかならぬ『革命的コンミンューン』のスローガンは誤っているのである。「メンシェヴィキは自分たちの決議にこのスローガンを掲げている。前号参照」。なぜなら、歴史上知られているいろいろのコンミンューンは、民主主義的変革と社会主義的変革とをまさに混同したからである。これに反して、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁という。……スローガンは、革命が無条件にブルジョアのなものであり、もっぱら民主主義的な変革の枠を直接にはこえることができないことを認めながらも、この、当面の変革を押しすすめ、この変革にプロレタリアートにもっとも有利な形態を与えることをめざしており、したがって、社会主義のためのプロレタリアートのこの闘争に最大の成功をおさめるために民主主義的変革を最大限に利用することをめざしているのである」(二つの戦術『全集』Vol. p. 81) (傍線はわれわれ)

第二の点。プロレタリアートの独自性を守ることは、何よりもプ

ヴェト、シベリアおよび南部地方の鉄道委員会、サラトフ県の農民委員会、ノヴォロシリスクその他の都市の市革命委員会、最後に、カフカースと沿バルト地方の農村の選挙された機関がそれである。／蜂起が原始的、萌芽的な形態をとったのに照応して、蜂起のこれらの機関も同様にばらばらで、偶発的で、その行動は断固としたものではなく、革命の組織された武装力に依拠していなかった。だからこそ、これらの機関は、反革命軍の攻撃にあうやいなや、不可避免的に破滅しなければならぬ運命にあったのである」(「臨時革命政府と革命権力の地方機関についての決議草案」『全集』Vol. 10, p. 140)

このように、当面する民主主義的変革において、プロレタリアートは終始ヘゲモンたれ、と提起されたわけだが、プロレタリアートが一貫してヘゲモンとしてあり、民主主義革命を最後までおしすすめる、プロレタリア独裁を準備するために、プロレタリアートは一方では当面する革命の階級的内容がブルジョア的であり、社会主義的変革を課題とするものではないということを片時も忘れてはならない、とともに、他方、プロレタリアートは決して小ブルジョアジーのなかに溶解してはならず、独自性を守りぬかねばならない、ということが提起される。この二重の指示をプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁という戦術スローガンはプロレタリアートにはつきりと与えている。

まず第一の点。「旧制度、専制、封建制、農奴制に反対するの

プロレタリアートの独自の党に結集し、プロレタリアート独自の要求を掲げること、また、ブルジョア革命の過程で、プロレタリアートの党の最小限綱領がもれなく実現されるよう闘うこととしてある。

「人民蜂起が勝利に終わり、われわれがすすんででも権力に決定的な影響を与えるようになるとすれば、われわれはいったいどのような改革を実現するのか、これについてわれわれは、労働者と全人民に明瞭な、明確な概念を与えなければならぬ。……ロシア社会民主党第三回大会は、きわめてはつきりこれらの問題にこたえ、この改革の完全な綱領を示している。わが党の最小限綱領がそれである」前号に掲げたポリシェヴィキの決議を参照」(同p. 73)

「社会民主主義者は、どんなに民主主義的で共和主義的なブルジョアジーや小ブルジョアジーであっても、彼らにたいするプロレタリアートの社会主義をめざす階級闘争が避けられないことを、けっして、片ときも忘れてはならない。これは疑いのようなないことである。このことから結論されることは、別個の、独自の、厳密に階級的な社会民主主義政党がどうしても必要だということである」(同p. 73)

「ブルジョアジーはプロレタリアートにむかっていう。わが国の革命は全人民的な革命である。だから諸君は、特別の一階級として、自分の階級闘争にとどまらなければならない。『良識』の名

において、おもな注意を労働組合とその合法化に向けなければならない。ほかならぬこの労働組合を『自己の政治教育と組織化のもっとも重要な出発点』と考えなければならない。・・・／社会民主党はプロレタリアートに向かっていう。わが国の革命は全人民的な革命である。だから諸君は、もっとも先進的で、最後まで革命的な唯一の階級として、革命にもっとも精力的に参加するだけでなく、また指導的に「ヘゲモンとして」参加するように努めなければならない。だから諸君は主として労働組合運動の意味に狭く理解された階級闘争の枠のなかに閉じこめるのではなく、反対に、自分の階級闘争の枠と内容をひろげて、現在の民主主義的・全人民的なロシア革命のすべての任務だけでなく、将来における社会主義革命の諸任務もこの枠に包括されるようになるまで

努力しなければならない。だから諸君は、労働組合運動を無視せず、合法活動のどんな小さな余地も利用することを断念しないとともに、革命の時代には、ツァーリズムにたいする人民の完全な勝利、民主的共和制と真の政治的自由との獲得にいたる唯一の道として、武装蜂起、革命軍と革命政府の樹立という任務を前面に押し出さなければならない、と」(同pp.116-117)

あとプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の国家的階級的内容と政府の具体的構成との関連と相違について述べなければならぬが、これについては、トロツキーの主張の批判的検討のところで詳しく述べたい。

火 花 第 四 一 号

発行日 一九八五月一日

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定 価 三〇〇円